

マタイによる福音書22章「応答のない知識」

1A 招かれることと選ばれること 1-14

1B 招待されても応答しない人々 1-7

2B 応答しても、礼服を着ない人 8-14

2A ユダヤ人教師たちによる試問 15-40

1B 納税 15-22

2B 復活 23-33

3B 律法 34-40

3A イエスによる試問 41-46

本文

マタイによる福音書 22 章を開いてください。22 章の初めの 14 節は、21 章の続きになります。イエス様が宮に入られて、宮清めを行われ、病の人を癒され、教えておられたところに、祭司長たちや民の長老たちがやって来ました。そして、「何の権威によって、これらのことをしているのですか。」と問い詰めます。神殿に対して権威を持っているとされる彼らに対して、イエス様は彼らこそがまことの権威に従っていないことを明らかにされます。譬えを語られました。

一つ目は、兄と弟が父に言いつけにどう応答するか？ということでした。「行きません」と言いながら、後で思い直して行くことに決めたのは、取税人や遊女でした。バプテスマのヨハネが、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と説いて、それで悔い改めてバプテスマを受けたのは、取税人や遊女だったのです。普段は神に従っているとされるユダヤ人教師らは、ヨハネを信じませんでした。二つ目は、ぶどう園の農夫たちのことです。主人が収穫を取りに僕を送っても、打ちたたき、殺してしまいました。それで「息子なら敬ってくれるだろう」とのことで、息子を遣わしたら、彼は跡取りだからということで彼を殺してしまいました。このことは、イエスご自身のことを言われていました。こうやって、ヨハネも信じないで、イエスご自身も殺そうと思っているという最悪なものでした。

そして 22 章は、譬えの三つ目のことになります。一つ目は、ヨハネの説教に対する応答。二つ目は、イエスご自身に対する応答についての譬えでしたが、三つ目は、その後、使徒たちに対する応答が主に語られています。

1A 招かれることと選ばれること 1-14

1B 招待されても応答しない人々 1-7

1 イエスは彼らに対し、再びたとえをもって話された。2 「天の御国は、自分の息子のために、結婚の披露宴を催した王にたとえることができます。3 王は披露宴に招待した客を呼びにしもべたちを遣わしたが、彼らは来ようとしなかった。

イエス様は、聞いている人々にはよく知られた習慣を譬えに使っておられます。王が息子、つまり王子のために結婚の披露宴に人々を招待します。王は事前に招待状を送るのが習慣だったそうです。そして、招待しておいたお客を呼びに、僕たちを遣わします。それが結婚の披露宴の招待であれば、町全体を招待することさえありました。そして王に招かれることは、大きな特権です。披露宴は七日間も続くので、時間的な犠牲が強いられました。けれども、王に招かれることは名誉なことです。

ここでイエス様は、ご自分がその息子として譬えておられます。そして王は父なる神です。神の国においては、事実、大きな祝宴があることは旧約聖書においても、預言されています(イザヤ 25:6 等)。私たちは聖霊によって、その喜びや楽しみにあずかることができますし、私たちの礼拝や交わりがそのような聖霊の豊かさがあることを願います。ところが、招待された客たちは来ようとしませんでした。これは、ユダヤ人たちが預言者たちによる、主のところに来なさいという招きに応答しなかった歴史を話しています。

4 それで再び、次のように言って別のしもべたちを遣わした。『招待した客にこう言いなさい。「私は食事を用意しました。私の雄牛や肥えた家畜を屠り、何もかも整いました。どうぞ披露宴においでください」と。』5 ところが彼らは気にもかけず、ある者は自分の畑に、別の者は自分の商売に出て行き、6 残りの者たちは、王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしまった。

披露宴のための全ての用意をしたと言っているのに、それを拒むことは王に対する侮辱でした。しかも、この人たちは自分の生活を優先させて拒んでいます。畑に行く、商売に行くという理由を挙げています。さらに残りの者たちは、なんとその僕たちを殺してしまいました。

ここから、新しい内容に触れています。祝宴のために全てを用意したというのは、イエス様が甦られ、天に昇られて、聖霊を地上に遣わしてくださったことを意味します。そして使徒たちが、また別の僕たちとして遣わされていきます。ところが、ユダヤ人たちは彼らの使信に 응답しませんでした。そして、その全員が迫害され、ほとんどが殉教しました。私たち人間も、この姿ではないでしょうか？神の国への招きを受けているのに、商売であるとか、畑であるとか、自分の生活を優先させて、自分自身の人生を司っておられる方の招きに応えていないのです。

7 王は怒って軍隊を送り、その人殺しどもを滅ぼして、彼らの町を焼き払った。

二つ目の譬えにもありましたね、これは紀元後 70 年、その時から約 40 年後に起こる出来事がありました。ローマ軍がエルサレムとその神殿を破壊して、火で焼きました。

8 それから王はしもべたちに言った。『披露宴の用意はできているが、招待した人たちはふさわしくなかった。9 だから大通りに行って、出会った人をみな披露宴に招きなさい。』10 しもべたちは通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った人をみな集めたので、披露宴は客でいっぱい

になった。

招待されていた者たちが招きを拒んだので、招待されていなかった者たちを王は招待しています。それが、差別なく、通りにいる誰であっても集めて、それで客がいっぱいになったと言います。これが、異邦人たちの姿です。使徒たちがユダヤ人に宣教をしている中で、主が御霊によって、彼らに異邦人への宣教の啓示を与えられました。異邦人は、初めは神の招きからは蚊帳の外であったのに、ユダヤ人が失敗することによって、自分たちに救いの招きを与えられました。逆説的ではありますが、神の主権の中でこのようなことが起こったのです。「ローマ 11:11 彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせました。」

2B 応答しても、礼服を着ない人 8-14

11 王が客たちを見ようとして入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない人が一人いた。12 王はその人に言った。『友よ。どうして婚礼の礼服を着ないで、ここに入って来たのか。』しかし、彼は黙っていた。13 そこで、王は召使いたちに言った。『この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。この男はそこで泣いて歯ぎしりすることになる。』

祝宴の中に入るには、そのための礼服が必要です。けれども、王の主催する祝宴においては、その礼服をも王が提供します。ですから、どのような人も礼服がなくて困ることはないし、また反対に言えば、礼服を着ていないことは、自分に金がないという言い訳はできません。そこで、王が問い質していますが、ここで問題は黙っていることです。自分が正しいと思っているのでしょうか。それで、王は外の暗闇に放り出していますが、これは地獄のことです。

異邦人に対しても招きが届いたにも関わらず、その招きに応答しない人たちがいるということですから。わざわざ婚礼の祝宴の場まで来ているのに、礼服を着ることを拒むというその原因は何なのでしょう？ 聖書には、義についてそれを衣服のように身に着けるものとして表現されています。「主イエス・キリストを着なさい。(ローマ 13:14)」ですから、ここで何をしているかと言うと、自分ではなく、神の下さる義、キリストご自身を身に着けて、それで初めて結婚の披露宴の中に入ることができるということです。そのままの貴方では、入ることができないのです！ 自分が罪人なのに、この方が身代わりに罪となられ、そしてこの方が義なのに、私たちが代わりに義とみなされます。この交換によって、初めて神の御国に入ることができるのです。自分が正しいと思っているから、王からなぜ礼服を着ていないのか尋ねられても、答えることができなかったのです。

14 招かれる人は多いが、選ばれる人は少ないのです。」

この結論は、重くのしかかります。主は全ての人を救いたいと願っておられます。そして、招かれます。けれども、応答する人は少ないのです。応答する人は、ここでイエス様が言われるように「選ばれる人」であります。ユダヤ人は、自分たち民族が招かれた者であり、それで自動的に選ばれ

た者であるという自負がありましたが、イエス様が見事に招きと選びを区別されました。自動的ではないのです。選ばれている者であれば、招きに必ず応答します。

2A ユダヤ人教師たちによる試問 15-40

このようにして、イエス様が招きに応じないことを叱責されましたが、ユダヤ人の指導者らはイエス様を試します。けれども、試されてもイエス様はかえって質問し、彼らを確認に神のほうに招かれるのです。これから、彼らがイエス様を試しますが、それに答えるイエス様の言葉には、私たちキリスト者の生活にとっても、知恵がふんだんにあります。

1B 納税 15-22

15 そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにしてイエスをことばの罠にかけようかと相談した。

イエスが警えを語られた時に既に、彼らはイエスを捕らえようと思っていたのですが、群衆を恐れてそれができないでいました。それで、イエス様を言葉の罠にひっかけて、それで捕えることのできる機会を狙っていました。

16 彼らは自分の弟子たちを、ヘロデ党の者たちと一緒にイエスのもとに遣わして、こう言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれにも遠慮しない方だと知っております。あなたは人の顔色を見ないからです。17 ですから、どう思われるか、お聞かせください。カエサルに税金を納めることは律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。」

まず、パリサイ派の教師たち自身は行きませんでした、その「弟子たち」を行かせてパリサイ派色を表向き無くしています。そして、「ヘロデ党の者たちと一緒に」遣わしているのです。普段は、パリサイ派とヘロデ党は敵対関係にありました。けれども、イエスご自身を前にしてはイエスに敵対しているので、敵対している者たち同士が仲間になります。敵の敵は味方、ということです。

ヘロデ党というのは、その名の通りヘロデ家の統治を積極的に支持していた人々です。そして、ヘロデ自身がローマの支配を受けながら統治していたので、ローマの支配を受け入れている人々でした。ユダヤ地方は、ヘロデ大王の息子の一人ヘロデ・アルケラオが罷免されてからは、ローマが直接統治する、ユダヤ属州となっていました。カイサリアがその首府であり、総督がそこに駐在していました。イエス様の時は、ポンテオ・ピラトが総督でした。ヘロデ党の者たちは、ヘロデ家に統治してもらいたいので、それは嫌なことでした。けれども、現実的にはローマに反抗すれば、ローマはさらに強圧的に支配してくるのでそれは避けていました。民衆の暴動は、ローマが強権をふるう機会となるので、恐れていました。

そして何よりも、彼らはバプテスマのヨハネを憎んでいたことでしょう。ヘロデ・アンティパスがヨ

ハネを殺しています。その後が続く、イエス様も憎んでいたことでしょう。イエス様はヘロデのことを「狐」とまで呼んでいました。

対してパリサイ派は、ユダヤ教の中で民衆の宗教となっていました。彼らは、ローマがユダヤ人を支配し、その異教を押し付けて、自分たちの律法を守る自由を奪っていると思っていました。メシアが来られて、異邦人の支配からの解放をもたらすと信じていました。カイサルは自分のことを神として、救世主としていたので、彼を王とすることは、主が王であることを否定することと考えていました。そしてそのローマに媚びるヘロデに対しても、同じように敵対的でしょう。また、ユダヤ教徒であっても政治は横暴で、律法をまるで守っていないかのような生活ぶりは、パリサイ派の人には耐え難いものだったと思います。イエス様に、わざわざヘロデがあなたを殺そうとしていると報告してくれたのも、パリサイ派です。しかし、イエスに敵対するという点では一致したのです。

彼らは、「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれにも遠慮しない方だと知っております。あなたは人の顔色を見ないからです。」と言っていますが、これはへつらいです。本心ではありません。ローマに納税をすべきかどうかを、真っすぐに答えてもらい、その後はローマ当局か、あるいは群衆の手の中に落ちてもらうか、どちらかにできる巧妙な誘導尋問です。もし、「カエサルに税金を納めることは律法にかなっている」と答えられれば、群衆が騒ぎます。パリサイ派の持っている反ローマ感情は群衆も共有していました。相当、当時のユダヤ人はローマを憎んでいたようです。そして、「律法にかなっていない」と答えればローマ当局に逮捕してもらいだけです。

18 イエスは彼らの悪意を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか、偽善者たち。19 税として納めるお金を見せなさい。」そこで彼らはデナリ銀貨をイエスのもとに持って来た。20 イエスは彼らに言われた。「これはだれの肖像と銘ですか。」21 彼らは「カエサルのです」と言った。そのときイエスは言われた。「それなら、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」22 彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

イエス様が彼らを、「偽善者たち」と呼ばれています。霊的そうに聞こえる言葉を使って、実は悪意を持っていたからです。私たちも、模範的な答えが出来ても、心や行いで違うことをやっていれば、それは偽善となります。そして、イエス様は「税として納めるお金」を持ってきなさいと言われていますが、ここは神殿の境内だったので、ご自身も、周りの人たちも持ち合わせていませんでした。神殿に捧げるお金はシケルのみであり、ローマの貨幣はカエサルの肖像と銘が彫られているので、汚れているとみなされていたからです。それで両替商がいたのです。なので、誰かが持ってくるまで少し時間がかかりました。

それからイエス様がデナリ銀貨を見せます、そこにはカエサルの肖像が彫られています。そこで、誰の肖像と銘が彫られているかと尋ねられて、「カエサル」のだと答えました。それは単なるカエサ

ルではなく、神格化されたカエサルとして彫られていました。自分たちが偶像の国に支配されているのだという悔しい思いがユダヤ人にはあったし、律法を厳格に守ろうとするパリサイ派には特にありました。熱心党にとっては、武力で打倒すべく既にいろいろ動いていました。

けれども、イエス様は信じられないような完璧な回答をされます。カエサルの銀貨なのだから、カエサルに返しなさいと言われる。そして、神のものは神に返しなさいと言われる。ここで、「カエサルのものはカエサルに」ということを言われてから一呼吸入れられたかもしれません。そして、「神のものは神に返しなさい」と言われます。こちらが本望なのです。パリサイ派の人たちの間違いは何だったかと言うと、まことの神の像、神のかたちであられる方に献身していなかったことです。「ヘブル 1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」ここの、「現れ」は「姿」とか「像」とも訳せるものです。神のかたちの完全な現われ、神の像そのものがイエスだということです。

ここでイエス様が話されているのは、「教会のことは教会でやっていて、それで世の中のことは世の中でやっていなさい」という二元論、教会と社会の二重生活のことを話しているのではありません。そうではなく、「あなたがたは、神の国について、神の像であるわたしについて、しっかり取り組みなさい。」ということなのです。カエサルと神の国を同列に置いて、それを対立させていること自体が、意味のないことです。神の国が世の国にいかにか超越しているのかを忘れていますし、神の国の中に真実に生きていないことを表しています。そもそも、パリサイ人も、ローマによって与えられている生活基盤の恩恵を受けています。ローマ貨幣はもちろんのこと、道路も、そして一定の平和も与えられています。恩恵を受けていながら、神の名を持ち出してそれに反対すること自体が二重基準であり、一種の甘えでしょう。

キリスト者は、ローマ社会においてその後、反政府的行動を取ることはありませんでした。ユダヤ反乱の時にも、イエス様の警告もあってユダヤ地方から出て行って、難を逃れました。彼らもカエサルは主であるということは丁重に拒み、それゆえ激しい迫害を受けたのですが、それでもエローマには反抗せず、迫害を甘んじて受けました。新約聖書の時代にさっそく、イエスを信じるローマ百人隊長や親衛隊の姿が出てきます。そして歴史では、皇帝本人が回心しました。これが神の国です。神の像であるイエスに全てを明け渡し、カエサルのものはカエサルに返した姿です。国の権力に主の御名によって従ったからこそ、かえって国の権力をも飲み込みました。

2B 復活 23-33

23 その日、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て質問した。

パリサイ派がヘロデ党と共に行き、イエスの回答に驚嘆して出て行ったので、それで今度はサドカイ派が来ました。サドカイ派は、紀元前二世紀頃から現れた社会貴族の人たちでした。パリサイ派が、律法の厳格な遵守が特徴であったのに対して、サドカイ派は神殿礼拝の中心でありまし

た。神殿が礼拝だけでなく、ユダヤ社会をまとめる中心になったので、経済や政治なども司る役目を祭司職やその関係者が担っていったのです。ユダヤ人議会であるサンヘドリンでは、議席の過半数を占めていました。民衆はパリサイ派に支持されていたので、パリサイ派の意見に従うことが多かったのですが、いかにローマ社会の中で自分たちの地位を確保し、それでユダヤ社会がローマの中で守られるように動いていました。

そのため、ガリラヤ地方でイエス様が宣教を行われ、パリサイ派の律法の解釈に真っ向から対立している衝突は聞いていましたが、さほど関心を示していませんでした。けれども、ローマが介入してくるのではないかと懸念したために、イエス様を処理してしまうほうが得策だと考えたのです。ヨハネ 11 章に、大祭司カヤパの政治判断にそのことが表れています。結果、紀元後 70 年に神殿がローマによって破壊されて、同時にサドカイ派も消滅したのです。

24 「先生。モーセは、『もしある人が、子がないままで死んだなら、その弟は兄の妻と結婚して、兄のために子孫を起さなければならぬ』と言いました。25 ところで、私たちの間に七人の兄弟がいました。長男は結婚しましたが死にました。子がいなかったので、その妻を弟に残しました。26 次男も三男も、そして七人までも同じようになりました。27 そして最後に、その妻も死にました。28 では復活の際、彼女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。彼らはみな、彼女を妻にしたのですが。」

復活についての質問です。ここの彼らの質問の前に、彼らがどのような信仰を持っていたかを説明します。彼らは、パリサイ派と違って口伝律法は認めていませんでした。しかも、基本的な教えはモーセ五書だけであり、それ以外の書物は参考程度でした。神は日常生活に直接介入するような方ではなく、また死後の復活は認めていません。物質主義者で、死後の命は認めておらず、天使や悪霊の存在も否定していました。ですから、イエス様が復活してから使徒たちを迫害したのはサドカイ派が中心であり、パリサイ派は同情的でさえあり、イエス様を信じた人々もかなりいました。サドカイ派の立場を知ると、いかにパリサイ派とイエス様の教えが近いかわかりますし、パリサイ派とイエス様の確執は、実は近いからこそ起こっていたことを知ります。彼らの姿勢が正しいからこそ、陥っていた過ちが見えにくく、それをイエス様が明らかにされたのです。したがって、私たちはむしろ、パリサイ派を外の人ではなく、「自分自身が陥ってしまう過ち」として見ていくべきです。

ここでの質問は、申命記 25 章 5-6 節にある律法が背景にあります。その家の名が絶えることは、神が主に与えた土地の相続が絶えることになり、神はそのために兄が死んだら、弟がその妻をめとらないといけないと教えられました。ルツ記が、この律法を守るために行われた結婚を描いています。パリサイ派もちろん受け入れていた律法です。それでサドカイ派は、この律法を使って復活が馬鹿げた教えであることを主張しているのです。復活した後に、七人の兄弟と結婚していた妻は、一体誰の妻になるのか？という問いです。

29 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは聖書も神の力も知らないのです、思い違いをしています。

サドカイ派に対するイエス様の答えは明快です。聖書も知らない、神の力も知らないのです、思い違いをしているというものであります。以前、興味深い議論をある未信者の人としました。彼は、キリスト教のイエスは嫌いだ、人間イエスを知りたいと言ったのです。何か尤もらしいのですが、「では、どうやって人間イエスを知れるのですか？」と尋ねたら、誰かが書いた本しか読んでいないようなのです。私は言いました、「そういった人々も第一資料があつて、それが聖書そのものです。聖書こそが、イエスの人柄や有様を知る唯一の書物ですから。いっしょに、聖書を読んでみませんか？」と言って、ただの朗読です、ヨハネの福音書を音読していこうと誘いました。かなりそわそわしてきました。そう、聖書を一度もまともに読んだことがないのです。

「神の力」についてもそのとおりです。人の力によって、全てのことを思い計ろうとしています。午前礼拝で話しましたように、聖書は不自然なこと、非日常的なこと、不思議なことといっぱいです。こんなことを書いたら、人が躓いて読めないよ、もっと信じてもらえるように分かり易く書いたら？と思うのですが、実はそういった不自然なところに出くわすとき、実はそれが神によるものだからということなのです。神が介在しているからこそ、非日常的であり、神がおられることの証拠なのです。人間が分かり易く書かれているのであれば、それは人の力であり、神の力ではありません。

30 復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。

サドカイ派の過ちは、復活の体について、今の肉体と全く同じように考えていたからです。人間が死ねばそれが朽ちます。その朽ちたものが、どのようにして甦って、再び肉体になるのか？と思ったり、また同じように結婚するような体であると思ったり、それは人の視点であり、神の視点ではありません。イエス様は、「天の御使いたちのよう」と言われています。パウロは、今の肉体はアダムと同じように土地の塵で造られたが、後の体は天において、神のかたちに造られたものなのだという話をしています(1コリント 15:16-49)。そこでは互いが誰であるかの認識はありますが、結婚関係は肉体で結ばれるようなものではなくなっています。

31 死人の復活については、神があなたがたにこう語られたのを読んだことがないのですか。32 『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」33 群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚嘆した。

イエス様は、サドカイ派がモーセ五書のみが教えの基であることを知っておられたので、彼らの土俵に乗って復活を語られたのです。ここは、主が燃える柴の中で、モーセに現れた時のことですが、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」と言われました。もし、アブラハム、イサク、ヤコブが死んで生きていないとすれば、「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコ

ブの神であった」と、過去形になるはずで、現在形で書いているということは、アブラハム、イサク、ヤコブが生きていることを前提にしているからです。500 年ぐらい前に生きていた人々について、モーセに神が現れた時に、彼らが生きているという前提で話しているのです。死んだら終わりと教えていたサドカイ派には、強烈な反証となったのです。

3B 律法 34-40

34 パリサイ人たちはイエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、一緒に集まった。35 そして彼らのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。36 「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」

パリサイ人たちにとって、サドカイ派の復活に付いての議論は、悩みの種になっていたに違いありません。それを見事にイエス様が論駁されたのを聞いて、それでパリサイ派が集まったのです。再び、その中での律法の専門家がイエス様を試す質問をしますが、罠に陥れる要素は少し抜け、本当に知りたいから尋ねる要素が強くなっているように思われます。

ユダヤ人が守る律法というのは、聖書の中で数えて 613 あると言われています。その 613 の律法を、全て平等に重きを置いて守るのはあまりにも無理があるので、どれが重い命令で、どれがより軽い命令なのかを分類しようとしていました。その中で、どれが最も大事なものになるのかは、常に議論されていました。これは私たちにも、深く関わる内容です。私たちキリスト者にも、新約聖書の中で命令が与えられています。けれども、その中で何が最も大きな焦点となるべきか？ということなのです。

37 イエスは彼に言われた。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』38 これが、重要な第一の戒めです。39 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。40 この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

第一の戒めは、申命記 6 章 4-5 節からの引用です。「6:4-5 聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」これは、ユダヤ教徒にとって「シエマ」と呼ばれる、根幹をなす命令です。シエマとは「聞け」という意味です。主なる神、ヤハウェが、私たちの神であり、唯一、すなわち比類なきお方である。だから、「心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」ということです。十戒を呼んでも、第一の戒めから第四の戒めは、神を愛するということから来るものです。そして、第二の戒めはレビ記 19 章 18 節からのものです。「あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。」十戒であれば、第五の戒めから第十の戒めが、対人関係のものでありこれに属します。そして、この二つの戒めがあって、律法と預言者全体がかかっているということです。

使徒パウロも、これが律法であり、キリスト者が守るべきものであることを話し、使徒ヨハネも兄弟を愛することについて強調しています。

これを聞いていたパリサイ派は、第一の戒めはそのまま喜んで聞いていたことでしょう。自分たちはこれを守っていると思ったかもしれませんが、けれども、第二の戒めが同じように重要であるというところは、復讐してはならない、恨みを抱いてはならないという文脈の中で語られているので、これだけでも彼らには罪意識が出てこないといけなはずです。なにしろ、イエス様を殺そうという悪意があったのですから。ヨハネの手紙第一は、そういった意味で非常に読むのが難しい手紙です。その内容が難しいのではなく、むしろ内容があまりにも単純で明快だからです。目に見える兄弟、同じように神によって生まれた兄弟を愛せないのなら、目に見えない神をどうして愛することができるのか？という問いかけだからです。隣人への愛は、神への愛と密接につながっているということです。

そしてもちろん、神への愛なくして、隣人への愛はありえません。ここで人間中心に考えていく人々が多いです。神への恐れ敬いがないままに、愛しましょうという言葉が今日、横行しています。人々が受け入れているものでも、それが神の前で罪であれば、それを罪とみなすことがその人を愛していることとなります。そして神の愛なしに、人を愛しているといっても、その愛には限界があります。私たちの愛は、敵をも愛する愛です。超自然的な愛であり、十字架に付けられたキリスト抜きにして、愛を語ることはできません。ある人は、「クレイジー、気違いじみた愛」と言いました。この二つの戒めは、どちらかだけ切り離して考えることはできません。

3A イエスによる試問 41-46

41 パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった。

パリサイ人たちが、これまでイエス様を試していましたが、今度はイエス様が彼らにお尋ねになっています。これまで見てください、彼らが何とかして捕えようとして試していたのですが、その度にイエス様は、彼らをご自身に招いておられます。王子の婚姻の披露宴のように、神ご自身に目を向けさせ、神の招きに応答させようとしておられます。そこで彼らにとって、大きな障壁となっているメシア理解を、正そうとされます。

42 「あなたがたはキリストについてどう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」43 イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは御霊によってキリストを主と呼び、44 『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで』』と言っているのですか。45 ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」46 するとだれ一人、一言もイエスに答えられなかった。その日から、もうだれも、あえてイエスに質問しようとはしなかった。

これは午前中、お話ししたことです。キリスト、メシアがダビデの王座から来て、神の国を地上に立ててくださることを、パリサイ人たちは信じていました。そして、私たちも信じています。けれども、そのメシアが、人としてのダビデの子だけでなく、神から生まれた方、神の息子ご自身であることも預言されていることです。ダビデの世継ぎの子であると同時に、神の独り子であり、神と同一であることも預言されています。これはとても不思議なことで、ユダヤ教も、イスラム教もどちらも認めていません。しかし、明確に神には子があり、子も創造の神であり、しかし聖書には神はひとりだとしているのです。箴言 30 章 4 節には、こうあります。「だれが天に上り、また降りて来たのか。だれが風を両手のひらに集めたのか。だれが水を衣のうちに包んだのか。だれが地のすべての限界を堅く定めたのか。その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。」天地を造られた方の名は何か？と尋ね、それだけでなくその子の名は何かと尋ねています。神には子がおられ、その子も天地を造られたのです。

ある人はこんな説明をしていました、「羊の子は羊。神の子は神」であります。天使も神の子と呼ばれているところがありますが、神によって造られたという意味での子です。また、神を信じている者が神の子と呼ばれますが、それは神の養子縁組になったということです。しかし、父なる神の永遠の関係を持っている子がおられ、この方が全ての関係の元になっていて、その関係の中に人々を招き入れようとしているのが、救いと言ってよいでしょう。「あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。(1ヨハネ 1:3)」しかし、人は罪を犯して神から引き離されたので、御子ご自身が世界を救うキリストになられたということです。

パリサイ派だけでなくサドカイ派も、いつかダビデの子として生まれた方が、人としてのメシアだけでなく、神から来た方、神の御子であることに直面しなければならなかったのです。しかし、それを認めることは、自分の全てのあり方を否定することになります。捨てることになります。その自負を捨てられないので、イエスに妬みを抱き、殺してしまいます。イエスが肉体を取って世に現れたというのは、このように全く現実の世界で、神ご自身を受け入れることに他なりません。それは、彼らが葛藤したように、非日常的であり、理解しがたいことであり、受け入れがたいものかもしれません。けれども、確かにここには神の御手があることを認めざるをえないものでしょう。いつも、心地よいものではないのです。そこに、山上の垂訓の心の貧しさがあります。その貧しさがある時に、神の国が自分のものになります。